

十 徹底眞悟の絶對境

佛法は眞劍でなくてはならぬ。頭がぐらつく位でなくては、藥の效驗も出ぬ。後に群賊惡獸、前に水火二河、止まるも死せん、還るも死せん、往くも死せん、一として死を逃るゝ所なしと、ギツクリ行きつまつた處にこそ、水火の中間に一條の白道が見え、此の道を辿つたらばと思ふ刹那、前後に發遣招喚の聲を聞いて、本願の白道を驀進することが出来る。されば、どん底まで行きつまれ、そこに道は開けんのみ。

越後塔の濱の一女、心に病む所があり、態々命がけ京都へ上つて、香樹院師に謁し、「この後生どうしやうく」と涙ながらにお尋ね申しました。師はたゞ

鶴の脚は長いなり、鴨の脚は短いなり、その儘の御助けぢや。

との一言で、ツト座を起ち退かれて、とんと相手にして下さらぬ。女は頗る本意なく、且つその冷酷さへ怨んでも見たが、イヤまでくと、是非なく歸路につき、路すがら終日終夜、汽車はなしトボく歩きながら、右の御言葉繰返しつゝ「鶴の脚は長いなり、鴨の脚は短いなり、その儘の御助けぢや」とやつて行く中、何時となく、大悲の光にほのくと聞は離れ「ア、この御恩どうしやうく」と云ひながら、家に着いたと云ふ。行きがけには、この後生どうしやうく、歸り路は、この御恩どうしやうく。一轉した味、この間實に何とも云へぬではないか。先づこの後生を眞實に氣付いた人が、この御恩と眞實に徹底するのであります。

安藝の眞實院大嬴師の所に、夫婦のものが御法話を聞きに參つた、所が和上は烟草盆を提げながら、ちんばを引きく、御出ましになつて御法話をなされるのに、聖人一流の御文章をくりかへし聞かせて、拜讀するばかりであ

つた。女房は主人に向つて細聲で「力のない事ぢやナア」と云つて居つたが暫くすると主人も堪へ兼て「モーシ和上さま、其御言葉は誠に結構でござりますが、もう少し變つた所を御聞かせ下さい」と云はれた時、和上は早速其場を立ちて御座敷に引籠り、までどくらせど御出ましが無い。そこで夫婦は顔見合せて、女房は主人に向ひ「いらぬ事を云はれるゆゑ、和上様は御出ましが無い」。「それでも貴様も力がないと云つたぢやないか」と云ふ内、主人は和上の室にまゐつて、「和上様、先刻のでよろしうございますから、もう一度御読み下さつてお話にきりをつけて下さい」といへば、和上は「あれでなければならぬモウ一度話してあげませう」と、又御出ましになつてから聖人一流の御文章さまを、「聖人一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候、乃至御恩報盡の念佛とこゝろうべきなり」と讀む中に、御慈悲が徹したと見えて、何時の間にやら、夫婦の者は兩眼より涙をホロくとかぼし、我を忘れて拜聴するゆゑに、和上も我を忘れて讀んで居られたが、遂に和上の方から「同行變つた御文を讀みませうか」。「イヤ變つたのはいけません、其御文をもう一度讀んで下さい」。「代へようかな」。「イヤ、代へてはいけませんぬ」。「かはつたが好からう」。「かはらないのが結構でございます、もう一度お読み下さい」。

法然上人は、極悪最下の人と仰せられる。それが私共には仲々承知が出来ぬ。却つて極善最上とまでは思はずとも、そんなに悪くはないと考へる。それがそもく感じの鈍い、愚が中の極愚、狂が中の極狂であるのであらう。その極悪最下の人のために、極善最上の法が成就せられてあると聞き、落ちてはならぬと心配するより先に、落してはならぬと急つて下さる方があると承はつては、ご親切肝に銘じて、辱けなさに涙がホロく出ずには居

られまい。茲こゝに「廣大難思くわうだいなんじの慶心きやうしん」といふ、眞實しんじつの莞爾にっこりが顯あらはれて參まゐります。